

(昭和53年3月卒業生)

佐渡島外海府の地域研究

— 女性の仕事と通婚域を中心として —

荒川裕子

新潟県佐渡郡相川町の島北岸の地方は、外海府と呼ばれ、両津湾岸の内海府と対し称される。本研究の対象地域としたのは、この地方の24部落であり、旧村域としては、金泉、高千、外海府の3地区である。

古来、海山とわずかな低地をその生産の場として、自然発生的に基が築かれていたこれらの部落に、今日見られるような米作中心の生産形態が定着する契機となったのは、近世佐渡金銀山の開発であった。即ち日本海廻船の拠点港を擁しつつ、大鉱山都市相川の近郊村として成長してきたことである。はじめは、薪炭と鉱山労働力の供給が重要であったが、後に相川の人口増大による食糧需要の伸びが、石見国からの漁業移民による姫津の成立、他部落での米作の昂進を促した。そしてこのような状況にあって、最終的な変革への引き金を引いたのが、鉱山坑道排水技術の水田灌漑への応用であった。

この地方は、集落は海辺の低地に限られているが、その背後には幅約300m～1kmに及ぶ海岸段丘が控えている。古くは、河川沿いや湧水のある土地のみが古田として米作の唯一の場となっていた。この灌漑技術によって段丘上の新田開発が進むに伴い、人口は増加した。しかし米の生産を中心とする村落形態がほぼ確立した17世紀末以降、鉱山は衰退の一途を辿り、この地方は、相川からやや独立した形での成長を続けることとなった。そして明治末には、追って人口減少の途を辿り始めた。

3地区の人口は現在6,000余人、昭和30年には1万を越えていたから、近年における減少の著しさがわかる。各部落の規模は、最小が人口64、世帯数22、最大が人口907、世帯数194である。

本論文では、当地方の土地と、そこで営まれる生活の実態を把握べく、2つの方法をもってその軸としている。ひとつは既婚女性10名からの聴き取りによる、仕事と婚姻を中心とする調査であり、もうひとつは、アンケートによる通婚域の広がり、買い物先、町へ行く頻度の現状調査である。

前者は、人の半生～一生という時間の幅、即ち21才から77才までの女性をもって、仕事と結婚生活を中心とする日常生活を語ってもらったものが、そのまま結論でもある。なぜ女性を選んだかについては、主帯主による兼業が総農家の86%を越える事実を見てもわかるように、土地により強く結びつく女性の日常をもって、地域の生業のあり方を見たいと考えたこと、婚姻による移住も女性の方により多く、それに伴う生活の変化を実感として受けとめていることなどが挙げられる。しかし何といっても、農村の女性達の労働観が、いかに地域での生活を表現しうるかを試みてみたかったということが、大きな理由となっていることは確かである。

この調査によって得られた結果の中から、形式的に把握するものを取り上げてみるならば、まず、

時代が新しくなるにつれての、労働の軽減化が挙げられる。2世代の差のもたらしたその変化は著しい。ニドラ負いと呼ばれる、丸太の山からのかつぎ出し作業は、林道の整備に伴い、約10年前にはほぼ消滅した。また段丘上の水田からの稲の負い降ろし作業や、炭負い、長桶負いも、農道、索道ができるに及んで見られなくなっている。これらの作業が女性に委ねられていた昭和30年代以前においては、過重労働による身体への悪影響も顕著に見られ、30代以上の女性の苦労は大きかった。

77才、65才の女性の行っていたシナへぎ、ネリバタによるシナ織り、裂織りなどの自家用衣料生産も、現在では民俗的遺産と化している。その他にも、産婆の手による生家での出産から病院出産へ、母親や姑による育児から保育所全入への移行が見られる。

婚姻の成立契機となったものに関しては、77才の女性が、スキゾイといって、山での負い子の際に恋愛で結ばれ、子供が誕生して結婚したことで、21才最年少者が友人と結ばれたことを除けば、いずれも部落内の人、特に夫方の親戚からの話で決まっている。それらのうちで、見合いの形をとって、一応本人の了解を得た上で決定したものは、わずかに1件のみであった。それも昭和52年のことである。スキゾイは、当時既に廃止されていた寝宿の実質的継続を思わせるが、その後大正、昭和となつて、少なくとも30年代までは、周囲の者が決定することが続いてきたことを示している。これはまた、式の盛大化ともなつて表われてきている。

77才の婦人には、アジミミといって、長桶ひとつ背負って婚家へ出向き、挨拶をし、イッバイメンを食べたのが、儀式のすべてであった。その下の65才の人は、髪結い留袖で簡単な挨拶だけ、50代以下の人になると、披露を2度3度と行なうようになった。その場所はここ10年位前から、婚家より町の宴会場、あるいはそこからの料理の取り寄せに変わってきている。

婚姻についてさらに注目すべきことは、結婚後の生家とのかかわりである。外海府のみならず、佐渡島一般には、嫁の「センダク帰り」といって、農閑期に当る彼岸、稲刈り前、暮の大掃除前とそれぞれ1週間から20日間位、里へ帰る習慣があった。この里帰りは、嫁が婚家で経済的実権を握るまで続けられた。多くは子供が2.3人でき、姑が年をとり、又は亡くなるまで、ということであった。そしてその時期が来るまでは、嫁入り道具も運び込まないことが多かった。もちろん、部落により、家により若干の事情は異なっていたようだが、10名の中でこのセンダクを行なったのは、38才の女性ひとりだけだ、だが、他の人からの聴き取りによって、一般には40代以上の人はほとんどが経験している。ただし戸地、戸中部落ではまったく聞くことができない。

65才の戸中の婦人と、戸地の41才の人は、結婚後数日～数ヶ月間、生家へ戻って夜を過ごし、着替えもそこでしていた。センダクはないが、昼間の婚家での労働奉仕としての嫁、即ちアジミ婚の残留と考えられるのである。こちらの方がセンダクよりは近方に生家があることを意味しそうでもあるが、部落内婚ができなくなって、毎日の里帰りが季節時にまとまって、と変わってきたものかどうかは、今の所判明していない。いずれにせよ、嫁はユイ女であり、正式に婚家の一員となるには、子供もあり、カカ（経済的実権を握る者）となっていることが条件であったと思われる。

なお、水田を持たぬ純漁村姫津ではどうかというと、ここでも暮のみのセンダク帰りのことは聞いており、里帰りした嫁は、他部落同様、仕事着を縫ったり、オイコのアルバイトに出たりしていた。戦前には確実にこの風習があったというが、漁村であるにもかかわらず、近隣農林部と似た習慣を持

つことは、注目に値する。

大倉の51才の女性は、昭和35年頃に、同部落でセンダクを廃止した旨を発表している。この頃を境に、嫁のあり方そのものが、大きく変わってきていることが察せられる。

以上のように、嫁が労働力視、即ちユイ女として見なされてきたことは、当然近隣農家からの入婚を意味する。10名の女性のうち7名までは、特出したわけではなかったが、部落内から嫁いでいる。そこでこの地域での通婚の地理的範囲はどの程度のものであったかと調査を行なったのが第2の方法である。

金泉・高千・外海府の3中学校の全校生徒家庭数271を対象に、質問紙法によって、結婚による人の出入りを尋ねたものがそれである。世帯主回答で92.3%が得られた。

それによると、祖父母から子供の代までの、各家庭への入籍総数279のうち、同部落内からの者が63.4%、同地区内他部落からが21.9%、相川町他地区からが7.5%、島内他市町村からが3.9%、ここまでで計96.1%が島内から来ている。入婚の時期は、中学生の家庭ゆえに、昭和30年代と、それに続いて大正末から昭和初めにかけてのものが2つのピークを成しているが、その他の時期のものも含まれてはいる。男性の件数はきわめて少ないため、性差は判別しかねるが、地区別に見ると、総数133の高千では、地区内から90.2%で、島内で99.2%となる。最小の外海府地区では総数56のうち地区内69.6%、島外が8.9%となっている。但し、地区の規模の大小が比較の際には重要である。外海府のように小さいと、どうしても地区内に相手が見出しえず、近隣の他地区から求めることが出てくるであろうから、一該に比率をもって比べえない由縁である。事実、外海府地区では、南隣の高千地区の北部よりの入婚も目立っている。これを時期別に見ると、戦前と戦後では、部落内が69.2%から58.2%と減り、同地区他部落が18.8%から24.7%と増えている。また戦後でも新しい時期となる程に、入婚域は拡大している。しかし、昭和35年以降のもののみでも、島内からの入婚が依然95.8%を占めている。

出婚については、世帯主のもとの家族で、結婚を契機に家を出たものを取り上げたが、この地域の広がりには入婚とは比較にならぬ程大きくなっている。総出婚数273件のうち、島外が48.0%、島内他市町村7.7%、相川町他地区7.7%、同地区内他部落9.5%、そして同部落内へが27.1%となる。時期は、回答のほとんどが戦後のものであるが、やはり地区別に見ると、同地区内への出婚は高千地区(総数124)の38.7%に最大の割合を見、外海府地区(総数39)の30.8%が最小となっている。島外への出婚は金泉地区が最大で110件中、54.5%を占める。男女別では、女性190件中32.1%が部落内、12.6%が地区内他部落となり、男性83件のそれぞれ15.7%、2.4%に比べ、より近い所へ出ている様子が読み取れる。このことは、就職による若年人口流出の現象とよく似た印象を与える。

この通婚域についても、姫津のことが注記されなければならないのだが、回答の中には、姫津より近隣農村への出婚は皆無であった。それに対し、農村より姫津への入婚は若干見られている。この事実は、農業と漁業という生業の相違に基づくものであろうが、果してどれ程の長い歴史を経てこのような動きが見られるようになったかは、今後の研究に待たれるところである。

なお同アンケートでは、日常生活の場の広がりを参考にするために、現在と戦前の買い物、通院、

入院先および島内島外の13の町へ行く頻度を問うた。

買い物については、金泉地区の相川への依存の大きさ、高千地区の同地区、外海府地区における一中心性が示されるとともに、野菜の自給率の高さを表わしている。戦前には、野菜は言うまでもなく魚の自給も多かった。そして戦後になって隣町佐和田（中心集落は河原田）へ行くことが目立って多くなっている。重病の場合は金井町の総合病院へ入ることが多いが、それ以外の魚、肉、野菜、シャツなど下着類、よそゆき着・時計・家具などの購入、歯科・内科への通院は、ほぼ佐和田までで完結している状態にある。なお最遠の岩谷口から河原田までは、バスで約2時間を所要する。

町へ行く頻度は、相川へは金泉地区では週1回以上との答が多く、他2地区では週1回～月1回の間のものが最も多い。ついで佐和田へは、いずれの地区でも月1度位は行く者が多く、他に月1回というものが目立つのは、両津、真野（中心集落は新町）、次いで新潟が挙げられる。

以上のようなアンケート結果をごく概略的に言うなら、特色として入婚域の狭さ、それに比べて広い買物先、さらに広い出婚域が挙げられ、それも時代が下がるにつれて範囲は広がってきていることが言える。

2つの調査結果を更にまとめてみると次のようになる。

ここ60～70年来の地域での仕事、婚姻のあり方の変化は著しく、特に昭和30年代を境とする前後の時期は対照が明白である。農業の機械化が進み始め、また道路をはじめとする諸設備が整うに至って、この地域特有の山、段丘における女性の労働は大幅に軽減された。時々は同じくして、センダク帰りというような、嫁の生家への依存、婚家への労働力提供を示す風習も消え、そして入婚、出婚域は拡大の方向にある。

しかし同地での生活が、見た目にもそれ程変化しているかという点、それは疑問である。なぜなら、人口の減少と高齢化が進み、依然土地に住む人は同地出身の人がまだ多く、地域そのものの姿は、時の流れ程には変わっていないからである。女性の仕事が増えたことは事実大きな変化であったが、それでも依然として、中年以上の働き、生活の姿には独特なものが残る。

ただ出婚や就職によって他地へ、特に都市部へ行った近縁者との連絡、マスコミによる精神面への働きかけが、地域での生活を徐々に変えてゆく原動力となりうることも考えねばならない。極端な場合は、数十年の後に世代の交替がおこった時、一転して、昔の面影をとどめぬ全国画一的な様相と化すことも考えられる。但し、本質的な結婚観や土地に強く結びついた生活様式そのものが、その程度の時間の経過で簡単に変わるものかどうかには疑わしいところであるが。

わが国における花き園芸の地域的展開

— 花き主産地形成に着目して —

太田理子

(要旨)

I. 研究の目的と方法